

地域コミュニティの 防災力

連載 第15回

共助で乗り越えた避難所運営と要援護者対策



富士常葉大学大学院 環境防災研究科 教授
重川 希志依

東日本大震災の発生から数か月が経過したころから、被災者の方たちに直接お話を伺うことができるようになりました。その時に何度も耳にしたのが、「この震災では行政はあてにしていけない、とりあえず自分たちで何とかしなければ」という言葉でした。津波災害から命を守ることができた人たちが、真っ先に考えたことは「この寒さから生き延びること、生きて翌朝を迎えること」でした。さらに、津波による被災を免れた地域にある避難場所だけでは、多くの被災者を収容することができず、公に頼らず自主的に提供された避難場所も多数ありますし、避難所での衣食住の確保やそのための物資調達も独自に工夫して取り組むなど、被災者が主体となった自主的運営が極めて多かったことは、これまでの災害には見られない点だと思います。

このような事例の一つとして、岩手県釜石市鵜住居地区でのある避難所運営をご紹介します。

●着の身着のまま避難、寒さをしのぐために
鵜住居地区は釜石市の北部に位置し、市内でも壊滅的な津波被害が生じた地区です。過去に幾度も津波による被災を受け、住民の津波防災に関する知識は非常に高い地域でもありました。震災当日、揺れがおさまるとガスの元栓を閉め、電化製品のコンセントを抜き、また周辺のお年寄り等にお互い声をかけながら、事前に決めていた22mの高台に多くの市民が避難しました。しかしそこから見た光景は、これまでの津波とは全く異なる様相で、これでもかこれでもかと、何波も押し寄せ、全てを破壊しつつ、日が暮れてもまだ、津波はおさまりませんでした。これまで自分たちがやってきた津波防災対策は一体なんだったのだろうかと自問自答し、茫然とする中で、まず考えたことが「寒さをしのぐこと」でした。周辺の枯れ木を集め、空き地でたき火を囲む人の数はどんどん増えていき、100人近くになりました。誰もが皆着の身着のままですから、お年寄りだけは近くにあ

地域コミュニティの 防災力 重川 希志依

る介護施設に入ってもらったり、空いている山小屋にストーブを用意し、そちらに収容したりしました。避難所の周りには、津波から助かった民家が15軒ほどあり、その人たちが持ち合わせの米、野菜を使い炊き出しをしてくれたおかげで、たき火を囲みながら一応の腹ごしらえをし、一晚を過ごすことになりました。

●食料調達開始

皆、着の身着のまま避難しているために、お金もない、免許証もない、ガソリンもないままに、翌朝になり内陸部を目指して食料調達を開始しました。途中立ち寄る農家では皆、無料で米や野菜を分けてくれ、また運搬用のトラックを貸してくれた人もいました。地域の方たちの炊き出しは続いていましたが、避難者の中から「いつまでも自分たちはお客ではいけない、自分たちでできることは自分たちでやりたい」という声が上がリ、そこから自主的な炊き出しが始まりました。その後、消防団の誘導で別の避難所に移ることとなりましたが、100人近い避難者がそれぞれ毛布1枚をたたみ、そこに真っ直ぐに寝たきりの状態で満杯というくらい、超満員の状態がしばらく続きました。



写真1 釜石市鵜住居（平成23年3月14日）

●避難所生活のルールづくりとユニークな工夫

震災前から地域活動のリーダー的な役割を果たしていた、80歳を超えた一人の男性が、避難所リーダーに選ばれました。最初の仕事は役割分担を決めることでした。「事務局」、「物資受け渡し」、「保健衛生・健康管理」、「厨房」、「トイレ」、「物資テント管理」の6つの役割とその担当を決め、さらに、起床5時半、20時半消灯、21時以降私語禁止、食事時間、全員ミーティング時間等のルールを決めました。リーダーからの命令ではなく、みんなの協力を得ながら運営することに留意したそうです。

またこの避難所では、ユニークな工夫がいくつも見られました。まず、食事を作る厨房班は2班に分け、毎日交代で調理に当たるようにしました。2班の間には、良い意味での競争心がわき、限られた材料を使いながら、朝夕に温かい味噌汁を出し、また、1日たりとも同じメニューはなかったそうです。

さらに、避難所生活のプライバシー確保のために、避難所に間仕切りをすることが望ましいとされていますが、ここではあえて間仕切りはしませんでした。皆で話し合った結果、こんなに狭いところで間仕切りをすれば、さらに狭くなってしまふ、狭いところだからこそ毎日の生



写真2 釜石市鵜住居（平成23年3月14日）

地域コミュニティの 防災力 重川 希志依

活がお互いに分かることが大事だと結論したのです。

物資を届けてくれる自衛隊や警察の人たちと、心をかよわせることも忘れませんでした。いつも感謝の気持ちを忘れずに、来れば必ず全員で「ご苦労様」と出迎え、彼らが昼食に持参している冷たいおにぎりを避難所で温めてあげたり、交代で被災地を引き上げる時には、ご飯とみそ汁で送別会を開いたりしているのです。他の避難所とは違う温かい心遣いに、悪い気がするわけがなく、避難所との関係が非常にうまくいくようになりました。

●辛くても生活のリズムを崩さない

積極的で前向きな運営を続けていたこの避難所も、避難者の家族に26名もの犠牲者が発生していたのです。ガソリンや車の手配に奔走しながら、日中は行方不明の家族の遺体さがし、夜避難所に戻ると、明日はどこを探してみようと、夜は皆で話し合いをする日々でした。一日中遺体さがしをすれば、夜は毛布をかぶって涙を流していたでしょうが、外の人たちには一切

それを見せなかった、そんな生活をしていました。だからこそ、100人近い避難者全員の健康を守るために、起床時間や消灯時間を厳格に守り、避難所全体の生活のリズムを崩さないことに、最も心を砕いていたのです。

●避難所生活をふりかえって

避難所のリーダーを100日間にわたり務めたこの男性は、「避難所生活で大変な犠牲を払わされたとも伝わっています。しかし自分たちの所は、それとはまったく無関係の日常生活だったという自負があります。」と話しています。東日本大震災では、震災直後から数か月にわたり、この避難所のように行政をあてにすることなく、様々な工夫をしながら自主的に避難所を支えていたコミュニティが数多くあります。自助、共助という言葉をよく聞きますが、私たちの想像をはるかに超えた、力強い自助・共助で災害に立ち向かってきた方たちに学ぶべきことはあまりにも多く、東日本大震災による被災を免れた人たちに伝え続けていかなければなりません。



写真3 震災から1年2か月後の鵜住居